

和歌山県海南市

大野中遺跡発掘調査概要

——わかやま市民生活協同組合集配所
建設工事に伴う発掘調査——

1985年 3月

社団法人 和歌山県文化財研究会

序 文

大野中遺跡は、国鉄紀勢本線海南駅東方約1.5kmの海南市大野中を中心に広く分布する遺跡であります。当遺跡は、西接して位置する海南高校々庭遺跡、近隣する海南第二中学校々庭遺跡、田鶴原遺跡などと関連し合いながら日方川流域の歴史を形成してきた重要な遺跡であります。

周辺は、近畿自動車道と歌山線が開通して以後、宅地化が急速に進み、今般、当地にわかやま市民生活協同組合の集配所建設工事が施行されることになり、工事に先立ち調査を実施してまいりました。その結果、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が多量に発見され、過去の調査などと共に、大野中遺跡の範囲・内容がより具体化されるようになりました。この成果をまとめ、大野中遺跡発掘調査概要として広く一般の活用にご供したいと存じます。

なお、調査の実施にあたり、種々御指導・御尽力をいただいた調査委員、和歌山県教育委員会、並びに御協力いただいた地元関係各位に対し厚く御礼を申し上げます。

昭和60年3月30日

社団法人 和歌山県文化財研究会

会 長 山 東 永 夫

例 言

1. 本書は、昭和59年度に実施したわかやま市民生活協同組合集配所建設工事に伴う大野中遺跡発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、社団法人和歌山県文化財研究会がわかやま市民生活協同組合から委託を受けて実施した。
3. 発掘調査に要した経費は、全てわかやま市民生活協同組合の負担によるものである。
4. 発掘調査は、和歌山県教育委員会の指導のもとに、社団法人和歌山県文化財研究会主任技術員吉田宣夫、同技術員土井孝之が担当し、昭和60年1月29日から同年3月30日にかけて実施した。
5. 発掘調査にあたり、海南市教育委員会、並びに地元の方々に種々御協力をいただいた。記して感謝する次第である。尚、銅鏝(45)の写真は、元興寺文化財研究所保存科学研究室による撮影である。
6. 出土遺物の整理、及び本書の作成は土井が担当した。
7. 調査委員会の組織は下記のとおりである。

○調査委員

掲 啓 正信（和歌山県文化財保護審議会委員）

巽 三郎（ ）

岡田 英男（ ） ・奈良国立文化財研究所平城宮発掘調査部長）

都出比呂志（ ） ・大阪大学文学部教授）

藤澤 一夫（ ）

○事務局

常務理事 鍋島伊津夫（県文化財課長） 幹 事 桃野真晃（県文化財課第二係長）

次 長 北野 全美（県文化財課主幹） 書 記 今出一里（県文化財課第二係主事）

◇ 梅村 善行（県文化財保護主事） 調査員 吉田宣夫（県文化財課第二係主査）

◇ 土井孝之（和歌山県文化財研究会技術員）

目 次

I. 調査に至る経緯と経過	1
II. 遺跡の位置と環境	1
III. 調査の範囲と方法	3
IV. 調査の概要	4
V. まとめ	13

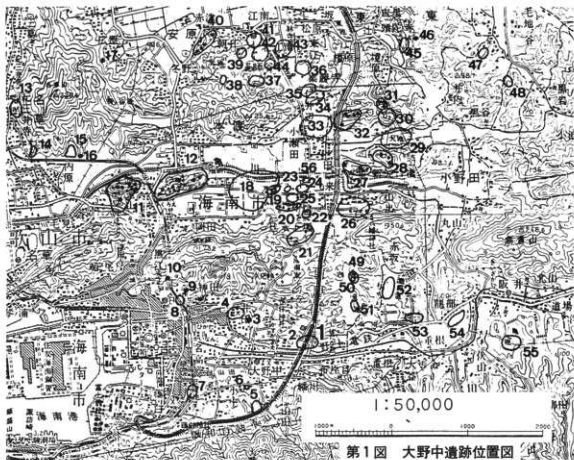
I 調査に至る経緯と経過

大野中遺跡は、海南市大野中を中心とした一帯に所在する縄文時代後期から古墳時代前期まで続く集落遺跡である。当遺跡内では、昭和44年度、同56年度に発掘調査が実施されているが、点としての調査であったため遺跡の範囲については未だ不明確である。今般、当遺跡の範囲内大野中宇八反田731-1地番において、わかやま市民生活協同組合（以下、わかやま市民生協と略称する）の集配所建設工事が計画された。そのため、県教育委員会は建設工事に先立ち、わかやま市民生協と協議し、建設予定地内において遺構・遺物の遺存状態を把握する試掘調査を早急に実施する運びとなり、昭和59年11月12日に試掘調査を実施した。試掘調査は、建設予定地内に対して幅員1mのトレンチを十字に設定し、褐色土の遺物包含層上面まで重機による掘削を行ない、包含層の遺存状況を確認した。その結果、明確な遺構を検出しないうまでも、遺存状況の良好な遺物包含層を確認し、建設予定地内全域に広がる事が予測された。再度、市民生協とその取り扱いについて協議を重ね、発掘調査の必要性と共に、調査の方法等を検討するに至った。

II 遺跡の位置と環境

遺跡の位置 大野中遺跡は、海南市大野中宇八反田を中心とする一帯を占める。当遺跡の北側には、東西に八幡山・城ヶ峰山が連なり、海南市西部を二分している。その南側に日方川、北側に亀川が流れ、各々小沖積平野を形成している。また、日方川の沖積平野の南側には、藤白山系が東西に連なり、南の地域とも分断された地形となる。当遺跡は、沖積平野の開ける八幡山の西南麓の標高12~16mに位置し、東西約150m、南北約160mの範囲を占める。当地域は、開けた水田地帯であったが、昭和46年に近畿自動車道と歌山線が開通して以後、付近の開発が急速に進み、また近年市街地の拡張による農地の宅地化が進行している。

大野中遺跡と周辺の遺跡 大野中遺跡は、昭和44年度に近畿自動車道と歌山線建設地内（第2図③地点）、昭和56年度に海南農協大野中支所建設地内（第2図②地点）において発掘調査が実施された。③地点では、弥生時代中期に属する円形竪穴住居跡1棟、溝4条とピット群を、②地点では弥生時代前期に属する溝状遺構1条を検出している。当遺跡の西側には、海南高校々庭遺跡（2）が隣接しており、運動場整地の際、縄文時代後期から古墳時代前期にかけての遺物が採集されている。本遺跡は、大野中遺跡と同じ性格をもつ一連の遺跡と考えられる。西方約1kmには、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての海南第二中学校々庭遺跡が所在する。東方約1.5kmには、日方川右岸の丘陵南斜面の標高約70mの高所（比高35m）に弥生後期高地性集落と考えられる田鶴原遺跡（53）が位置する。これら弥生時代から古墳時代にかけての4遺跡は、相互に関連し合いながら、日方川流域に展開した遺跡である。このような在り方は、亀川流域にも見られ、岡村遺跡（18）を核とした且来遺跡群・亀川遺跡（26）・多田東遺跡（29）・薬勝寺遺跡（35）・滝ヶ峰遺跡（30）



1:50,000

第1図 大野中遺跡位置図

No	遺跡名称	遺跡の種類、時代(時期)、備考	No	遺跡名称	遺跡の種類、時代(時期)、備考
①	大野中遺跡	集落跡、縄文後期～古墳前期	29	多田東遺跡	散布地、弥生後期～古墳前期
②	海南高校々延遺跡	散布地、縄文後晚期～弥生中期、古墳前期	③〇	滝ヶ崎遺跡	集落跡、弥生中期末～後期、日曜・高地性集落
③	地蔵寺古墳	古墳後期、円墳・須恵器杯1・甕3・高杯4	31	滝ヶ崎古墳群	円墳4基
④	海南第二中学校々延遺跡	散布地、弥生後期～古墳前期	③〇	養徳寺南山古墳群	古墳後期、円墳2基・槨式石棺1・槨六式石室1
⑤	細工谷遺跡	散布地、縄文、石鏝・サマカイト	33	仁井辺遺跡	散布地、須恵器・土師器
⑥	菩提寺王子跡	平安～室町、須恵器・陶器・瓦	34	新勝寺跡	寺院跡、奈良～平安、鑄石・軒瓦・雜瓦
⑦	鳥居遺跡	散布地、縄文後晚期、縄文土器・石鏝・スクレイパー・横	35	新勝寺遺跡	散布地、弥生、弥生土器・石片
⑧	奥の谷遺跡	散布地、奈良～平安	36	松原下遺跡	散布地、土師器・須恵器
⑨	楠本神社古墳	円墳・槨六式石室	37	江川遺跡	散布地、須恵器・土師器・瓦
⑩	奥の谷古墳	古墳後期、円墳・槨六式石室・須恵器・土師器・瓦器	38	大港遺跡	散布地、瓦器
⑪	宝山古墳群	古墳後期、円墳8基・槨六式石室3・槨六式石室3不明2	39	城の前下遺跡	散布地、須恵器・瓦器
⑫	山崎山古墳群	古墳中期～後期、前方後円墳1基・円墳15基	40	赤津古墳群	円墳3基
⑬	紀二井寺遺跡	寺院跡	41	城の前上遺跡	散布地、土師器
⑭	内原遺跡	弥生土器、土師器	42	曾田田遺跡	集落跡、平安、土師器・黒色土器
⑮	内原古墳	散布地、土師器	43	松原上遺跡	散布地、土師器・須恵器
⑯	内原古墳	散布地、円墳	44	新勝寺遺跡	散布地、縄文、石鏝・縄文土器
⑰	広瀬古墳	円墳・槨六式石室	45	須陀寺遺跡	散布地、弥生、石鏝・瓦(寺院跡もある)
⑱	岡村遺跡	集落跡、縄文後期～室町、統一約な範囲神位遺跡	46	須陀寺古墳	円墳
⑲	岡田八幡宮古墳群	円墳4基	47	大符木遺跡	集落跡、奈良～平安、竹葉器・須恵器
20	岡村古墳群	古墳後期、円墳4基	48	有ノ木遺跡	集落跡、奈良～平安、須恵器
21	且来下畑内古墳群	古墳後期、円墳6基(別名神子谷古墳群)	49	内池遺跡	散布地、縄文、石鏝・スクレイパー
22	且来下畑内遺跡	古墳前期、土師器	50	内池集落跡	集落跡、古墳後期～奈良、登壇石・須恵器
23	且来下遺跡	縄文後期、縄文土器	51	赤坂大港遺跡	散布地、縄文、石鏝・サマカイト
24	且来上遺跡	縄文後期、縄文土器	52	野田池遺跡	散布地、縄文、木製形実器器・石鏝・石鏝・石鏝
25	且来中遺跡	弥生後期～古墳前期	53	田崎原遺跡	散布地、弥生、石鏝下4・石鏝1・高地性集落跡
26	龜川遺跡	集落跡・塚跡、縄文後期～古墳前期、住居跡・方形集落跡	54	竜部遺跡	散布地、縄文、石鏝・サマカイト
27	多田北山古墳群	古墳後期、円墳4基	55	竜部遺跡	散布地、縄文、石鏝・スクレイパー
28	国守神社古墳群	古墳後期、円墳3基以上	56	且来V遺跡	弥生中期～奈良、弥生土器・須恵器・土師器

No. ○印は調査された遺跡。『和歌山県道跡地名表』1983年 『和歌山県埋蔵文化財発掘地調査報告』和歌山県教育委員会『海田市史』(第二巻史料編1) 『考古資料集』1979年 海田市史編纂部『岡村遺跡発掘調査報告』1983年 社団法人和歌山県文化財研究会 発行等を参考。

遺跡地名表

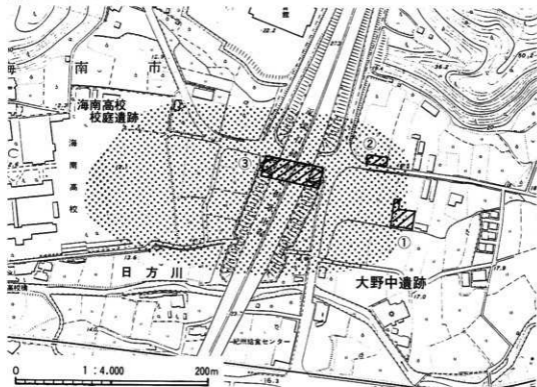
などの地域での展開が認められる。古墳時代全盛期では、日方川流域に所在する古墳が少なく僅か4基を確認するのみで、亀川流域に所在する古墳群の在り方と様相を異にする。古代・中世に至っては、熊野古道が南北に縦断するルートを通っており、古代の条里制、中世の垣内集落の成立など継起的な歴史の流れを示す地域である。

Ⅲ 調査の範囲と方法

調査は、わかやま市民生協集配所の建物建設予定地約400㎡と、本調査区の北西側において焼土の広がりを確認していた拡張区約40㎡の計440㎡を対象とした。駐車場予定地となる約700㎡については、特に遺構・包含層の破壊の恐れがないため調査対象外とし、擁壁工事の掘削部分の土層図を作成するにとどめた。

今回、調査した範囲は、従来より大野中遺跡の東端と考えられていた地点であり、水田として耕作の行なわれていた土地であるが、沖積平野全体からみれば北東から南西に向けて緩傾斜している。

調査地区の地区別は、任意の基準点(0・0)を南東隅に設定し、磁北に対しN-18°15'Eに振る基軸線により割付けを行い、基準点より東はE、西はW、南はS、北はNを冠し、これに基準点からの距離で地点を表示した。調査地区に設定した方4mの小区画は、各々の南西隅の距離をもって呼称することにした。



- ① 昭和59年度調査地区
 ② 昭和56年度 ③ 昭和44年度

第2図 発掘調査位置図

Ⅳ 調査の概要

調査の結果、調査区全域にわたり弥生時代後期から古墳時代前期（布留式併行期）にかけての遺物包含層が確認された。検出した遺構も、調査区全域に平均して分布しており、竪穴遺構、土壇、柱穴、溝などがある。今回、検出した遺構・遺物の時期は、過去2回実施されている調査で検出した遺構・遺物の時期と異なる様相を呈し、大野中遺跡の中での時期による占地の移動を示唆するものである。

1. 調査地区の層序

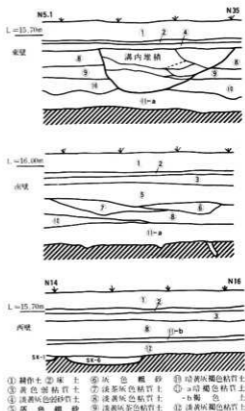
調査地区の基本的な層序は、第3図に示すように比較的安定した堆積状況を成し、現在の耕作土(①)床土(②~④)・日方川の氾濫による堆積層(⑤⑥)、古墳時代から中世にかけての遺物を若干含む旧耕作土と考えられる堆積層(⑧⑨)、弥生時代末から古墳時代前期の遺物を含む包含層(⑩)、同時期の遺物を多量に含む包含層(⑪-a・b)、弥生時代末の遺物が比較的多い包含層(⑫)、淡褐色砂質土(地山)、の順となる。調査の方法上第①層から第⑧層の一部までは機械掘削による排土を行った。第⑧層の一部から第⑫層までは、面毎に遺構検出を行い、順次人力による掘削を行った。第⑪-a・b層は、調査区全体に堆積しているが、第⑩層は、W2ライン以東に、第⑫層は北西範囲に堆積し、地区により変化しながら各々約5~20cmの堆積層である。大半の遺構は、第⑫層上面と地山面で検出している。遺物は、第⑩層から第⑫層まで平均して包含するが、中でも第⑩層におけるW8~W17、S1~N8に集中するため第⑩層上面から何らかの遺構の存在した可能性も考えられる。

2. 検出遺構

検出した遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて断続的にみられる方形竪穴遺構2基、土壇20基、溝1条、溝状遺構2条、落ち込み状地形2ヶ所、柱穴170ヶ所などがある。

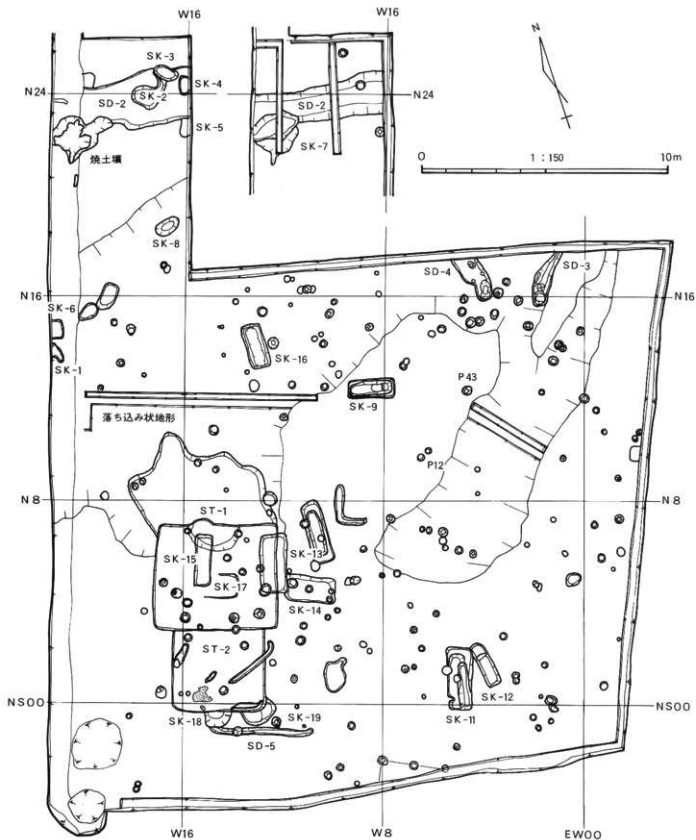
(1) 方形竪穴遺構 (ST) (第5図・図版2)

ST-1 東西4.9m・南北4.2mを測り、東西に長めのプランを呈する。軸線は、N-18°-E



第3図 調査区壁面土層図

(S=1/40)

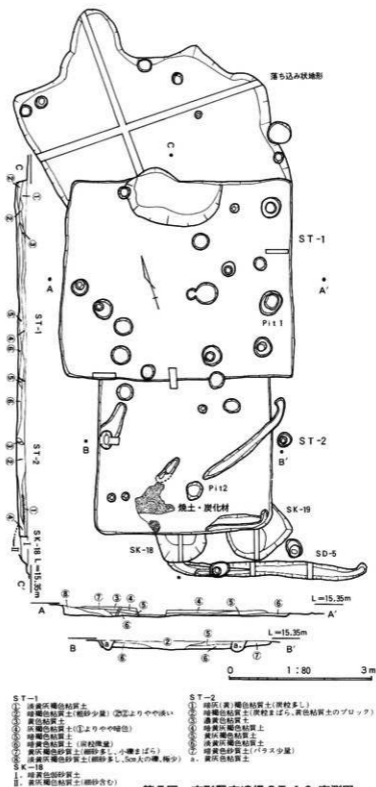


第4図 検出遺構全体図

に振る。壁高は、検出面より約10~20cmあり、ほぼ垂直に立ち上がる。北壁の西寄りには、東西1.8m、奥行き0.3mの出っ張りが認められ、床面より約5cm凹んだ状態であった。四壁とも壁際の壁溝は認められず、柱穴も定かでない。ST-1は、ST-2、落ち込み状地形の覆土を切って掘削されている。出土遺物は、床面より浮いた状態で第④層に集中し、壺・甕・高杯などがある。Pit 1の下部からは、広口壺(4)が出土した。

ST-2 東西3.7mを測り、南北3.2mを検出した。軸線は、ST-1同様N-18°-Eに振る。壁高は、検出面より約10~18cmあり、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土の南西範囲に、厚さ5cm前後の焼土・炭粒が堆積する。ST-2は、SK-18・19を切って掘削される。遺物は、床面より浮いた状態で出土した。

ST-1・2は、検出当初、住居跡と考えて調査を進めたが、壁溝・炉・貯蔵穴・柱穴が認められないなどの理由により、住居跡の可能性の少ない遺構と判断せざるを得ない状況である。



第5図 方形壜穴遺構 ST-1・2 実測図

(2) 土壌 (SK) (第6図・図版3・4)

土壌は、大別して第⑫層淡黄灰褐色粘質土上面、地山面に切り込まれたもので、平面形から区別して、長方形(a類)、階円形(b類)、不定形(c類)に分類できる。a類(SK-5・6・9~17)からは、細片のみの出土が多い。b類(SK-8)からの出土遺物は、極めて少量である。c類(SK-1・2・7)からは、比較的完形品に近い状態の壺が出土している。

a類 長方形土壌 今次の調査の中で比較的まとまりをみせる土壌群である。

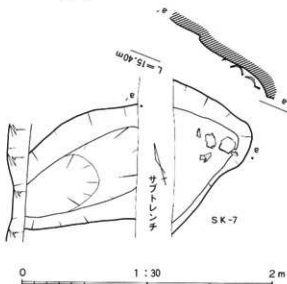
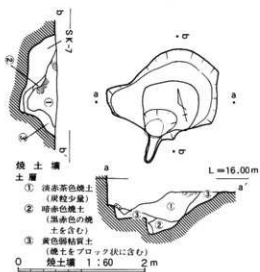
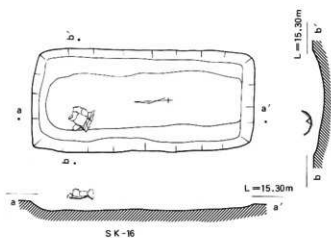
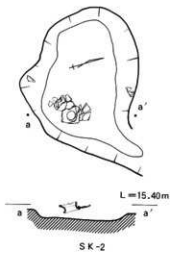
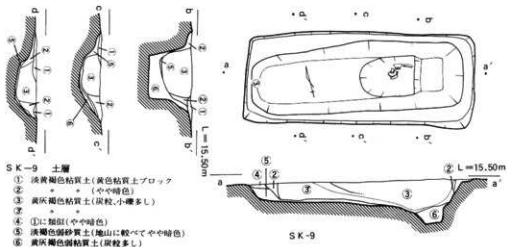
SK-5 短軸0.7m、深さ0.3mを測り、掘り方は断面U字形を呈する。**SK-6** 短軸0.8m、深さ0.1mを測り、掘り方は断面L字形を呈する。**SK-9** 長軸1.8m、短軸0.75mを測り、平均して0.2mの深さを有する。掘り方は、四方で浅い段をもち舟底形を呈し、東端で深さ約0.35mを測り一段深くなる。遺物は、東側に集中しているが、土壌底より浮いた状態で比較的まとまった状態で出土した。覆土は、長軸に対し中央部分と両側部分とで異なり、東半部に0.5~1.5cm大の炭粒が多量に含まれる。**SK-10** 長軸2.4m、短軸0.75~0.85mを測り、南側でやや広がる。平均して0.15mの深さを有する。掘り方は、四方で浅い段をもち舟底形を呈する。遺物は細片のみで、土壌底より在地産の庄内式甕の口縁が出土している。覆土の上層には、少量の炭粒が含まれる。**SK-11** 長軸2.4m、短軸0.8~1mを測り、北側でやや広がる。掘り方は、二段となり上段で約0.05mを測る。一段低い方は、土壌の東側に寄り約0.15mの深さを有する。遺物は、細片のみで、覆土より布笠式併行期の甕口縁部が出土している。覆土の北半に炭粒が集中する。**SK-12** 長軸1.85m、短軸0.5~0.55mを測り南側でやや広がる。深さは0.05~0.1mを測り、南側で深くなる。掘り方は舟底形となり、覆土は単層である。SK-12の北西隅がSK-11に切られる。**SK-13** 長軸2.2m、短軸1~1.05mを測り、南側でやや広がる。深さは0.05~0.1mを測り、中央部が最も深い。**SK-14** 長軸1.9m、短軸0.95~1.05mを測り、西側でやや広がる。深さ0.1mを測り舟底形を呈する。覆土の上層に少量の炭粒を含む。**SK-15** 長軸1.95m、短軸0.6m、深さ0.15mを測る。掘り方は、四壁の立ち上がりが若干外方に傾斜するL字形を呈する。東壁に沿って幅6~8cmの暗黄色粘質土を貼り詰めた状態であった。遺物は、比較的大きな破片が多く、土壌底より浮いた状態で出土している。**SK-16** 長軸1.8m、短軸0.8mを測り、深さは0.15m以上遺存していたものと考えられる。掘り方は中央部で軽く落ち込み、覆土は単層である。遺物は、土壌底より浮いて約1/2遺存した甕(16)が出土した。SK-16は、他のa類土壌に較べて炭粒の混入が少ない状況である。**SK-17** 短軸0.9m、深さ0.05mを測る。

b類 階円形土壌

SK-8 長軸1m、短軸0.6m、深さ0.15mを測り、遺物は極めて少量である。

c類 不定形土壌

SK-1 短軸1m、深さ0.15mを測る。覆土は単層で、広口壺(5)が出土している。**SK-2** 長軸約1.2m、短軸約0.9mを測る。遺物は土壌底より浮いた状態で出土し、広口壺(1)一個



第6図 土壌実測図

体と甕の口縁部破片がある。SK-7 長軸 2 m、短軸 1 mを測る。遺物は、土壌の肩部分より完形品に近い直口壺(2)一個体が出土した。各々、覆土の上層には、0.5~1 cm大の炭粒を多量に含む。

(3) 溝 (SD) (図版 5)

第⑩・⑪-a・b層上面において20数条の素掘り溝を検出した。幅員約30~50cm、削平のためか深さ約2~5 cm程度と浅く、長さも1 m未満から約12mのものともばらである。出土遺物・覆土などから、平安時代~室町時代に営まれた水田の耕作跡と考えられる。

SD-2 幅員約 2 m、深さ約0.3~0.4 mを測り、延長約5.5 mを検出したにとどまる。流れの方向は、ほぼ東西に東から西への流れが認められる。遺物は少量ではあるが、甕の口縁部破片(15)などが出土している程度である。SD-3・4 満底が一定でなく、凹凸が著しい。

(4) 柱穴 (Pit)

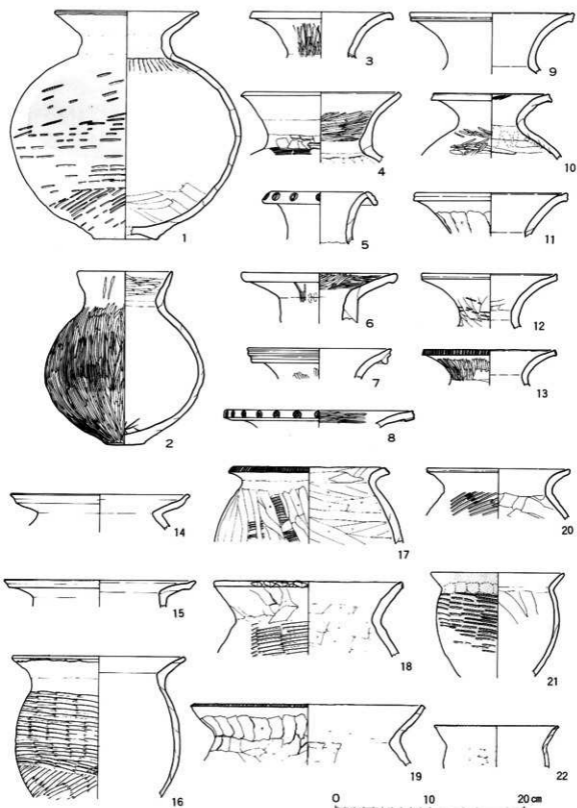
調査区の南際で、東西2間分の並びを検出した。柱穴は、掘り方径0.4 m、柱当り0.2 m、深さ0.25 mを測り、柱間は約1.3 mの等間隔である。pit 43からは、小型甕(21)と壺体部が重なった状態で出土した。pit 12からは、比較的多くの破片が出土した。その他のpitは、建物跡としての規則性に欠け遺物も極めて細片のみの出土である。

3. 出土遺物 (第7・8図、図版6~8)

出土した遺物は、大半が弥生土器・土師器で、壺・甕・高杯・鉢・器台・蓋・製塩土器がある。金属器として、銅鏃1点、鈍1点などがある。また、須恵器杯蓋・土師器椀・瓦器椀なども微量出土した。

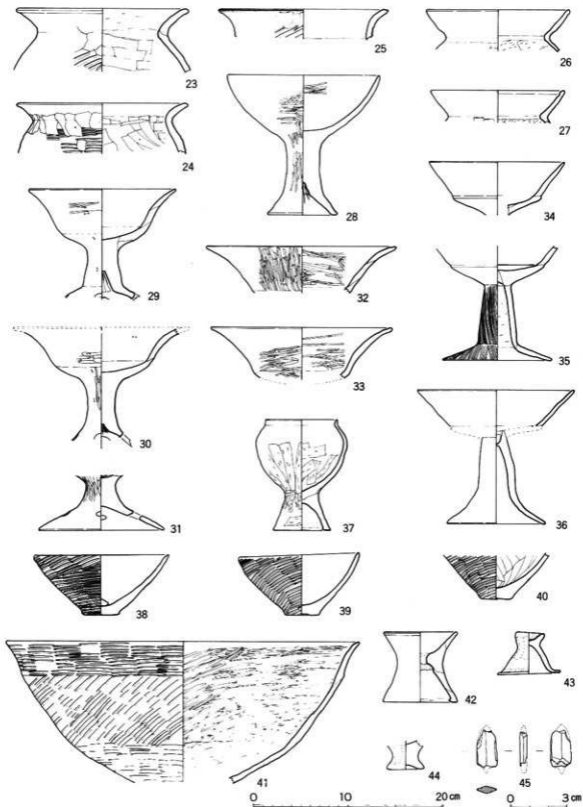
壺(1~13) 口頸部の形態により、A・B・C・D・E類の5種類が見られる。壺Aは、頸部の立ち上がり強く、口縁部で緩やかに外反して端部が外方に垂下するもの(5)。壺Bは、頸部がしまり、漏斗状に外方に開くものでB₁・B₂・B₃の3種類がある。壺B₁は、端部が三角形に肥厚し、端面に凹線文を施すもの(7)。壺B₂は、端部が肥厚せず面に面をもつもの(3・4・9~13)。壺B₃は、頸部で軽い段をもって外方に開くもの(4)。壺Cは、頸部が短かく筒状になり、口縁部が直線的に外方に開くもの(1)。壺Dは、口縁部が直線的に緩く外傾するもの(2)。壺Eは、直立する頸部から急に屈曲して外方に開くもの(6)。壺Fは、漏斗状に外方に開く口縁部に長方形の粘土を付加し、端面に装飾(竹管文)を施すもの(8)で、弥生時代後期の器台の系譜を引いたものとも考えられる。各々、体部は、壺C・壺Dに見られるように球形を呈するものと考えられ、底部は平底の明瞭なものと、平底ではあるが底部の小さいもの(2)に分類できる。

甕(14~27) 口頸部の形態により、A・B・C・D・E類の5種類が見られる。甕Aは、頸部の屈曲が著しく口縁部が受け口状を呈するもの(14・15)一体系の最大径が口縁部の径より小さいもの(15)を含めておく。甕Bは、頸部が丸みをもって緩やかに外反するものでB₁・B₂・B₃の3種類がある。甕B₁は、頸部が肥厚し口縁端部が若干丸みを帯びるもの(16)で、頸部内面の稜は顕著である。甕B₂は、口縁端部が丸みをもって外反し、体部最大径が口縁部の径を凌駕するもの(20)



1—SK-2, 2—SK-7, 4—ST-1内Pit1, 5—SK-1, 12·16—SK-15, 14—SK-4, 15—SD-2, 21—Pit43, 8·10·19—褐色土, 6·7·13·22—暗褐色粘質土, 3·9·10·11·17·18·20—淡黄灰褐色粘質土

第7图 出土遺物実測図1



23・35—西側落ち込み状地形、28—ST-2、24・25・29・31・32・34・36・45—褐色土、28・30・33・38・44—暗褐色粘質土、26・27・37・39—43—淡黄灰褐色粘質土

第8図 出土遺物実測図2

・23・24)。甕B₃は、口縁部が短く、端面に刻み目を施すもの(17)。甕Cは、口縁部が比較的小さいもので、外傾するもの(18)と、内湾気味に上外方にのびるもの(19)の2種類がある。共に頸部外面は強く粗いナデ調整が縦方向に行なわれ、口縁端部に刻み目が施される。甕Dは、外湾する口縁部を有し、端面は若干平らな感を与え刻み目を施すもの(25)。甕Eは、小型の甕(21・22)である。各々、体部は、右上りないしは平行気味の粗いタタキ調整を行ない、底部は平底(40)になる。甕Fは、器壁が薄く、口縁部が内湾気味に上外方にのび端部が丸みをもつもの(26)、若干肥厚するもの(27)があり、内面頸部以下は右上り方向のヘラ削りを行なうものである。その他、甕には口縁部が直立する形態のものも認められる。

高杯(28~36) 形態により、A・B・C類の3種類が見られる。高杯Aは、脚柱部が中実・筒状で、杯部が碗形のもの(28)。高杯Bは、杯部が緩やかに屈曲しているもの(29~33)。高杯Bは、脚部が短いもの(31)、長いもの(29・30)があり、基本的には(31)のような内湾し端部で丸みをもち、脚部の中ほどに4孔の穿孔を施す脚部がつくものである。高杯Cは、杯部が稜を成して屈曲するもの(34~36)で、(35)では脚柱部外面にハケ目調整を行なうものである。

鉢(38・39・41) 小型のもの(38・39)と、大型のもの(41)の2種類がある。

その他、土器では、脚台付甕(37)、小型器台(42)、ミニチュア蓋(43)、整塩土器(44)などがある。

銅鏝(45) 有蓋式に属し、断面形が菱形を呈するものである。現存長1.9cm、身幅1.1cm、厚さ0.4cmを測る。

V ま と め

1. 検出遺構

方形竪穴遺構は、構造・遺物の出土状況などから住居跡の可能性の低いものと考えているが、未だ住居跡とする見方を捨て難いものであり、今後の検討に委ねることとしたい。出土遺物から、庄内式併行期に属し、土壌a類との切り合い関係から、土壌a類に先行する遺構である。

土壌は、3分類した中で、a類の長方形を呈する土壌が比較的遺存状態も良好で、完掘できなかったものを含めて一定の方向性を示す。大別して、3方向を示す。①長軸方向が、ほぼ東西の土壌(SK-5・6・9・14・17)、②長軸方向がほぼ南北の土壌(SK-10・12・16)、③上端方向がやや東に振る土壌(SK-11・13・15)である。土壌の性格については、全て同一条件(掘り方・覆土の堆積状況)ではないが、a類は土壌墓と考えて差し支えないものと思われる。c類は、a類ほどの規格性をもたないが、完形品に近い土器が一個体ずつ出土し調査区の北西側に集中することなどから土壌墓の性格を有するものと考えておきたい。出土遺物から、SK-1は第5様式併行期に、SK-2からSK-17は庄内式併行期に属するものである。

溝は、東西方向に流れをもつSD-2を検出しており、土壌SK-2・7などに切られるため土

塚群より時間的に先行するものである。SD-3・4は、不明確な点が多い。

2. 出土遺物

出土遺物の大半は、弥生時代から古墳時代への過渡期に属するもので、形態の分類により第5様式末段階、庄内式併行期、布留式併行期の3時期に対応するものである。出土遺物の中で、第5様式末段階の様相を呈するものとして、壺A(5)、壺B₁(7)、甕A(14・15)、高杯A(28)などがある。庄内式に併行する時期のものとして、壺B・C・D・E・F(1~4・6・8~13)、甕(B・C・D(16~25))、高杯B(29~33)、鉢(38・39・41)、脚台付甕(37)、小型器台(42)、ミニチュア蓋(43)などがある。布留式に併行する時期のものとして、甕F(26・27)、高杯C(34~36)、製塩土器(44)などがある。庄内式に併行する一群の土器の中には、古い段階に属するものと、新しい段階に属するものがあるようであるが、出土状況からみて分離することが難しい。

銅鏡(45)は、包含層褐色粘質土からの出土で、同層からは庄内式併行期・布留式併行期の土器が混在して出土するため所属時期については明確にできないが、形態からみて、庄内式併行期に属するものと考えられる。

3. 遺跡の動向

遺跡の範囲 今回の調査区は、従来より大野中遺跡の東端と考えられていた地点であるが、遺構の検出状況、遺物の出土状況、包含層の堆積状況などから、遺跡の範囲はさらに東側に広がるものと予測される。

遺跡内の動向 大野中遺跡内における3次の調査、海南高校々庭遺跡の立会い調査などの状況を考え合せれば、時期による集落の占地関係が大ざっぱに把握できる。縄文時代後・晩期は、第2図③地点から海南高校々庭にかけて希薄に、弥生時代前期は②地点を中心として、弥生時代中期は縄文時代の範囲と重複しつつ濃密に、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては今回の調査区(①地点)を中心とした在り方が考えられる。ただ、遺跡全体を平均して調査していない現状では、飽くまで推論の域を脱し得ない。

今後、開発に対処するためにも範囲確認調査が早急に望まれるものである。

- (註1) 「大野中遺跡」『近畿自動車道と歌山線埋蔵文化財調査報告』(『和歌山県文化財学術調査報告書5』) 1972年 和歌山県教育委員会
- (註2) 「和歌山県 紀北」(『弥生前期地域論』) 1984年 弥生文化研究部会 帝塚山考古学研究所 P144 大野中遺跡
- (註3) 「考古資料編」『海南市史』第三巻 史料編Ⅰ 1979年 海南市史編纂室
- (註4) 「和歌山県遺跡地名表」1983年 和歌山県教育委員会によれば、且来Ⅰ~Ⅴ遺跡となるが、これらは同一遺跡内と考えるのが妥当であろう。
- (註5) 県内での、銅鏡の出土例は、第5様式の時期から見られる。第5様式から庄内式併行期までの出土例としては、大谷川遺跡(4点)、橋谷遺跡(2点)、中塚山遺跡(1点)、大目津泊り遺跡(1点)、水鳥山遺跡(1点)、大水崎遺跡(1点)が知られている。

大野中遺跡遠景
(南東より)



調査区全景
(西より)

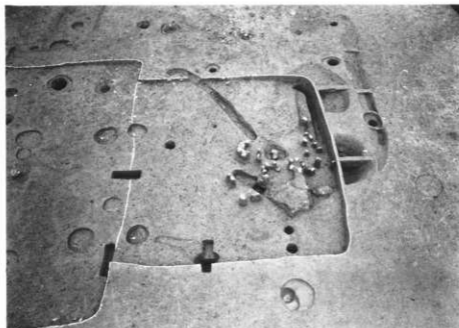


調査区全景
(北より)





方形竪穴遺構
ST-1 (西より)

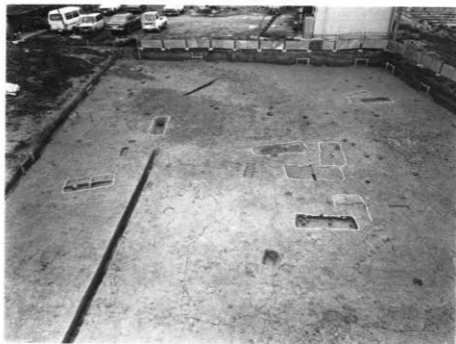


方形竪穴遺構
ST-2 (西より)

下段左
ST-2 遺物出土
状況細部

下段右
ST-2 遺物出土
状況細部

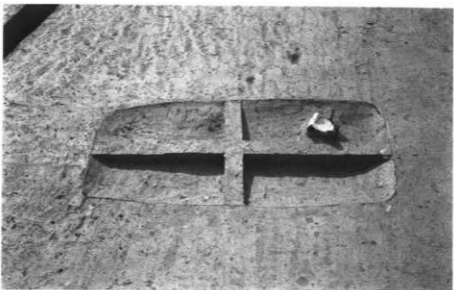




土壙群全景
(西より)



土壙 SK-9
(北より)



土壙 SK-16
(北東より)



土壌 SK-10
(北東より)



土壌 SK-11
SK-12
(東より)



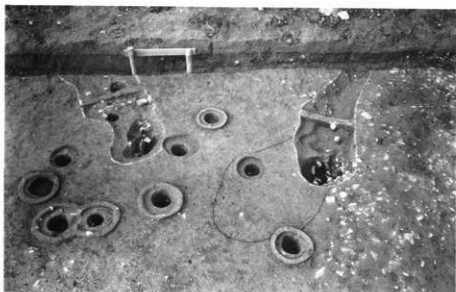
焼土壌
(西より)



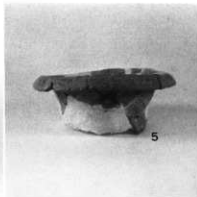
溝 SD-2
土壌 SK-7
(西より)

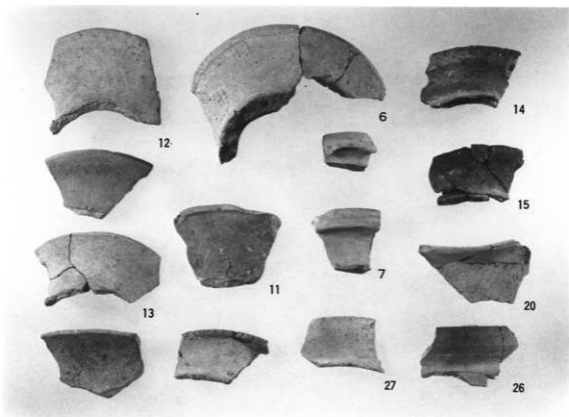
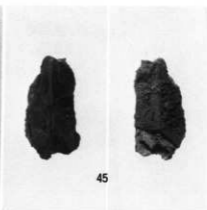


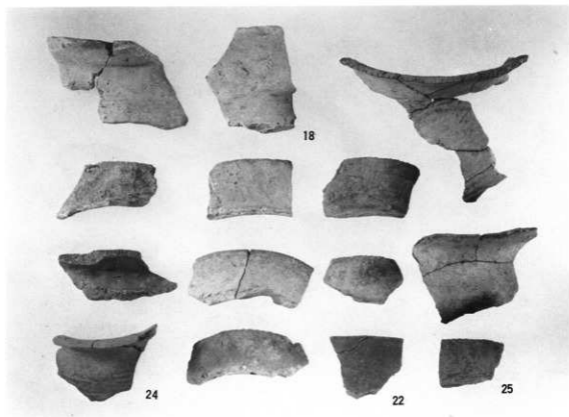
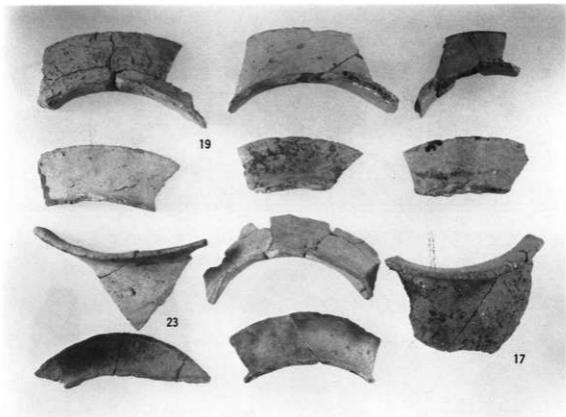
溝 SD-2上層
(西より)



溝状遺構 SD-3
SD-4
(南より)







昭和60年3月31日発行

大野中遺跡発掘調査概要

— わかやま市民生活協同組合集配所
建設工事に伴う発掘調査 —

発行 社団法人 和歌山県文化財研究会

印刷 邦 上 印 刷